

## ベルンハルト博士の客死を悼む

佐々木現順

ハンブルグ大学教授ベルンハルト博士は去る九月五日ネパールにて、四十歳の若さを以て客死されたことは世界学界にとつて最も哀しむべき悲報である。彼の二回目のネパール探検であった標高千五百米の山上で心臓障害のためだったといわれる。

博士はゲッチェンゲン大学に於て、ワルドシュミッド博士の研究に協力しつつ法句經に関する尨大な名著梵文 *Udānavarga* 二巻を世に出されたばかりであり、今後、そのテキスト研究を出版すべく幾多の資料を整理していた。ネパール行きもそのためであった。私のハンブルグ大学に於ける在職間（一九六六—六七）常に良き同僚であり畏友ともなり、互に講義に出席し合っていた間柄であったためひとしお人間の悲嘆をも痛感する。学的功績はウダーナヴルガ二巻の外、幾多の論文を名声の高い學術書に掲載している。それについてはなお別の機会に詳しく紹介して偉業をたたえたい。今はただ彼の悲報を伝えるだけである。

本学の田端哲哉君は三ヶ年の予定で当大学に留学している。

田端君の助力で詳細を知った。それによると、悲報をもたらされた時、ハンブルグ大学研究室員の集会で、アルドルフ博士は心からその死をいたみ「ドイツの佛教学の名声を全ヨーロッパに高からしめたのはまさにハンブルグ大学であり、その中心人物たるベルンハルトであった」と痛恨の情を吐露したという。彼と私はいつも「佛教学にチベット人を入れ、パリーを拡大し、佛教学の中心としたい」と語り合っていたことである。私が去った後、彼はそれを実践にうつしてくれた。即ち、直にチベット学者を招き入れ、チベット・梵語・パリー・漢訳を本国人の語学力で読破しうる学者、又、それぞれの分野の専門学者を集めるに成功し、ヨーロッパ佛教学の基礎を作った。一九七〇・七一年度の講義には *Mitla ras pa. mger. thbum*、或は梵巴の「ハバリニルブーナストラ、入菩提行論、*Bhāṭṭikāvya* 更に *Visuddhimagga* 及び「アビダルマ佛教学研究」まで講義中に入れている。原始經典中心のヨーロッパにアビダルマ研究を主題として挙げるに至ったことは最初のことであり、今後、國際的佛教学の向うところを我々に指向してくれたものと言わねばならない。博士はその若い一生を法句經研究に捧げた。その法句經の中から一句を引用して以て畏友ベルンハルト博士に捧げ合せて我々後学の覚悟としたい。

彼の賢く、智ある、多く学べる、忍辱なる、戒を具せる、聖き、そのような善士総慧者に随うべし、月の星宿を行くが如く（二〇八偈）。